

6 「教育」に託す！最後は、「生きる意味」や「頑張ることの意義」へ回帰せねば?!

堂本 彰夫

(1) 今こそ、「教育」に目を向けるべきではないか！それは、何故か？

最近、なかなかコンスタントに、ここでの論考が進んでいないことを名状しているが、それは、ある意味「書きたいことがなくなった？」のが主たる原因であった（そのための努力をしていないのも、その一因であるが?）?!そして、この歳になって（直接、社会に関わることがなくなって?）、今更、こういうことを書いても始まらないし、折角ここで書いても、ツールの性格上（自HP上に、雑感的に記載するだけ?）、ほとんどの人は読まないし、たとえ読んでいても（閲覧数はそれなりにある?）、それが、今現在の彼/彼女らの仕事振り（職務や活動）には繋がっていない?少なくとも、そのことを実感させる、直接的なリアクションがないということであった（偶には、「読んでいます」と、儀礼的な言葉ももらうが?要は、直接的には、参考にするものがないということでもある?笑?）?もちろん、読んでもらうための工夫や働きかけ（PR）が、ほとんどなかったということもあるのかもしれない（読んでもらいたいのなら、それなりに努力をせよ!ということであろうか?これまた笑?）?!ただし、これ自体は、依頼原稿や、学会等への投稿論文ではないという、当方のモチベーション（ある種の意欲?）の問題とも言えるが…そんなことを思いながらの、今回の論考である?!

だが、今回のそれは、昨今の政治や経済を巡る諸々の動向（国際関係を含む）に関わって、私の無垢な（ある意味理想論的な?）教育論を、今こそ展開すべきなのではないかという、無謀な（無知 or 無恥を顧みずの?）パッションが頭を擡げてきたことによるものである?!どういうことかと言うと、それらの動向に、直接的で、強力な動員力、影響力を行使している人間（ここでは、基本的には「好ましくない?人間」のことであるが!）、例えば「政治家」や「実業家（起業家?）」、さらには「解説者」や「ジャーナリスト」の中に、そういう人間がいるということであり（もちろん、国の内外を問わず!そして、その中には、本当に許し難い政策、言い振りをなしている人物もいる!）、彼/彼女らの言動を見るにつけ、やはり、それらは、様々な「教育の力（学校教育だけではない!）」によってもたらされているのではないか?言い換えれば、その教育の成果（言動）が、彼/彼女らの思想や価値観（人間観/国家観等）、あるいは自己顕示（出世?）欲や支配欲、さらには他者不信の過度の表出（闇?）等に、大いに関わっているのではないかということである?!

要は、負け組の遠吠え、持たざる者の哀しき呟き、終わりし者の儂き嘆き、etc.とも言えるかもしれないが、最近の私には、そのように思えてならないということである!果たして、彼/彼女らは、「教育の力」によって、どのように生まれ育ち、生きてきた（いる）のであろうか?そして、そこで、何をもって「幸せ」と感じてきた（いる）のであろうか?何とも青臭い問いのようであるが（気恥ずかしい?笑）、結局は、外交にしる、内政にしる、あるいは経済や宗教活動にしる、それらは、人間（→人類）の幸せにつながるものでなければ、意味はないということであり、その良否（善悪?）の判断は、他ならぬ、その人間の思想や価値観から導き出されているということ、そして、その思想や価値観は、様々な「教育の力」、すなわち「他者との出会い・交流（影響の与え合い?）」によって生み出されているものであるということである（「独学」は、その一面を切り取ったものに過ぎない!）!ただし、ここでは、ある特定の誰かの、言うなれば「糾弾やあら捜し?」をするものではない!それに与えた「教育の力」の再考であり、その復権への道筋提示である?!

(2) 教育の「中立性」は、何をもたらしか?「忌避」「嫌悪」から、「改善」「変革」へ?!

ということで、(今回は?)とんでもない書き出しとなったが、では、改めて、ここでは、何を企図しているのか?それは、端的に言えば、個々の人間（国民?）にとって、眼前の政治や経済というものが、非常に重要である（必須である!）ということに変わりはないが、一方で、「教育（の問題）」が、不幸にも、それらから遠ざけられている?言い換えれば、政治や経済の問題（危機）が、生身の人間の言動によって齎^{たら}されていること、そして、それが、その国（家庭や学校、地域社会等）の教育力によるものだということが、議論の俎上に上らない?つまり、前者（政治と経済）と後（教育）が、別の問題として取り扱われているということである（当該の人物評価や人間関係の不全等は、いわゆるスキャンダルとして暴露されるが?）?!

ただし、これは、見方を変えれば、「教育」の方が、それら（政治と経済）を特別（軽?）視しているのではないかということである（忌避、否、敵視している?ピュア性を標榜している?）?!特にこれは、我が国において顕著となっているということであるが（歴史的な反省とも言えるが、それが、いわゆる「教育の中立性」及び、それに基づく「教育委員会制度」である!）、皮肉にも、この考え方/スタンスが、一方で、教育がもつ、それらへの影響力（正義や公正・公平への遡及力?）を、裏面に押し隠してきた?!つまり、片方からの「危険性」ばかりが意識され、他方の「意義・可能性」が、傍に追いやられた格好ともなっているということである

ある?!だから、その延長線上で、他ならぬ「教育関係者」が、それらとの関係性を肯定的に見ようとしてこなかったということである（良くも、悪くもなる！逆説的には、それほど、「教育の力」は甚大であるということである！近隣諸国のそれを見れば、歴然？だが、そういう事実は、他ならぬ目の前にも多々ある?）?!

余談だが、上記の「教育の中立性」（政治、経済、及び宗教からの「独立」あるいは「一定の距離の確保」!）は、憲法 89 条（公金や公の財産の使用に関する厳格な制限を設けることで、国家の中立性を維持し、国民の信頼を確保するための重要な規定）によって、側面支援されている！これもまた、歴史的反省からの贈り物ではあったが、その前提となるものまで否定したわけではない（ある意味苦肉の策であった?）?!つまり、「政治」「経済」「宗教」、それらからの「悪影響」を、可能な限り排除することが目的であったということであり、とりわけ、子ども達を、「厳しい、あるいは不正や汚濁が横行する?現実社会」、すなわち「政治」や「経済」、さらには「宗教」の世界から守り（遠ざけて）、そこで、ある意味純化された形で（無垢で、無限な成長可能体として?）社会に送り出すことが、彼らにとっての幸せであり、それが、大人社会の責任ともされた?!それは、当時の時代状況においては、まったくの善であり、正義でもあったのである?!実は、それが、他ならぬ「近代教育」の思想でもあった（J. J.ルソーやJ. デューイ）!だからこそ、教育関係者は、「善の唱道者」、「正義の実践者」であろうとした（彼らが、「聖職者」として位置づけられたのは、まさにそれ故であった!ただし、その後、「労働者」、そして「専門職」へと移行していくが!）?!

(3) 「中立→忌避?嫌悪?」ではなく、その存在意義を前面に出し、「かけがえのない役割」を期そう!

だが、実際には、そうした思想・実践は、脆くも、その時々時代の状況に飲み込まれ、挙句の果てには、その時代状況を、逆に鼓舞するような形で動いていった（戦争?競争社会?それらもまた、その時の「善」であり、「正義」であった?）!その反省が、先に挙げた「教育の中立性」であるが、それを標榜せざるを得なかった?しかし、まさに「現実の力」は、今もなお（否、永遠に!）あるのであり、決して、そのことから逃れることは出来ないのである!何故なら、子どもも当然であるが、個々人（国民）は、その「政治」や「経済」あるいは「宗教」に、すべて関わっているのであり、たとえそれが、「不正や汚濁の現実社会」となっているとしても、そこで生きていかなければいけないのである!それを忌避したり、あるいは非難するだけでは、なかなか現実是不変（これで良い、この方が幸せであると思う人も、実際にはいることもあって?ただし、無関心は、話にならない!気持ちは、分からないわけもないが!）?!ならば、どうするのか?答えは、意外にも?簡単である!自分（達）の力で、良いものは残し、悪いものは変えていく!そういうことである!

ちなみに、今、世界は、幾つかの国が、これまでの国際秩序（一応は、「冷戦終結後レジーム」と呼べるもの）を壊し、新たな世界危機をもたらそうとしている!しかもそれは、他ならぬ「一人の人間」による、言わば「独裁」という形で進められている（ように見える?）!もちろん、それは、単純な、その怪物?の個人的志向（嗜好?）（これも、れっきとした「教育の成果」ではあるが?）ではなく、自らの社会（国）における「善」あるいは「正義」（国益）という形で行われている（それ相応の大義名分は掲げられているという意味!）?!

いずれにしても、ここで言いたいことは、「教育の中立性」が、実際には、脆くもその存在意義を失くし、輝かしい栄光の向こうに追いやられている（観念の世界でのみ通用している?）ということであるが、よくよく考えてみると、教育には、その政治や経済（あるいは宗教）のあり方を、内面から力強く変えていく力がある!言い換えれば、それに関わる人間の思想や価値観を、良くも悪くも創り出していく力である!しかも、悪しき思想や価値観であっても、心ある人達や一生懸命に頑張っている人達との出会い・交流（支援）によって、良いものに変わっていく（そうした事例には、事欠かない!）!要は、そこに、真の「幸せ」が感じられているということであるが、極端に言えば、かの独裁者達も、その「幸せ」を求めているはずである（少なくとも、それがかけがえのないものであることは知っている?）?!その「幸せ」とは、俗に、「財（金）と健康と親愛者（愛）」だと言われるが（幸せの三要素）、他ならぬ最後の「親愛者（愛）」だけは、自分一人ではどうにもならない!そこにこそ、教育の力が必要なものでもある（ただし、それだけでは、やはり「幸せ」にはならない?その「総和こそ」が重要なのである!それが、「和」の形なのか?「積」の形なのかはともかく?）!

では、その「幸せの三要素」、とりわけ「親愛者（愛）」との出会いや交流の場とはどこか?それが、家庭であり、地域社会であり、そして、各人が、一時期所属することになる「学校」や「職場」ということになる!ただし、現代社会は、好きか嫌いは別として、その他多くの場や関係（ツール）もある!ある文芸批評家によれば、我が国は、今や「父や母を喪失している?」というものがあつたが、それは、一方では、確固とした「生きる基盤（父）」、他方では、そこにおける「優しさや包容力（母）」の喪失を意味する?!それが、まさに「共同体の崩壊」ということになるが、その「共同体」を取り戻すべく、「土壌を耕す/リレー/決して諦めない」というような言質は、そこにおける「教育の力」（もちろん「学校教育」を含む→「教育協働」=学校教育と社会教育の合力）の復権（回帰）を期しているとも言える!まったくの同感である!（つづく）